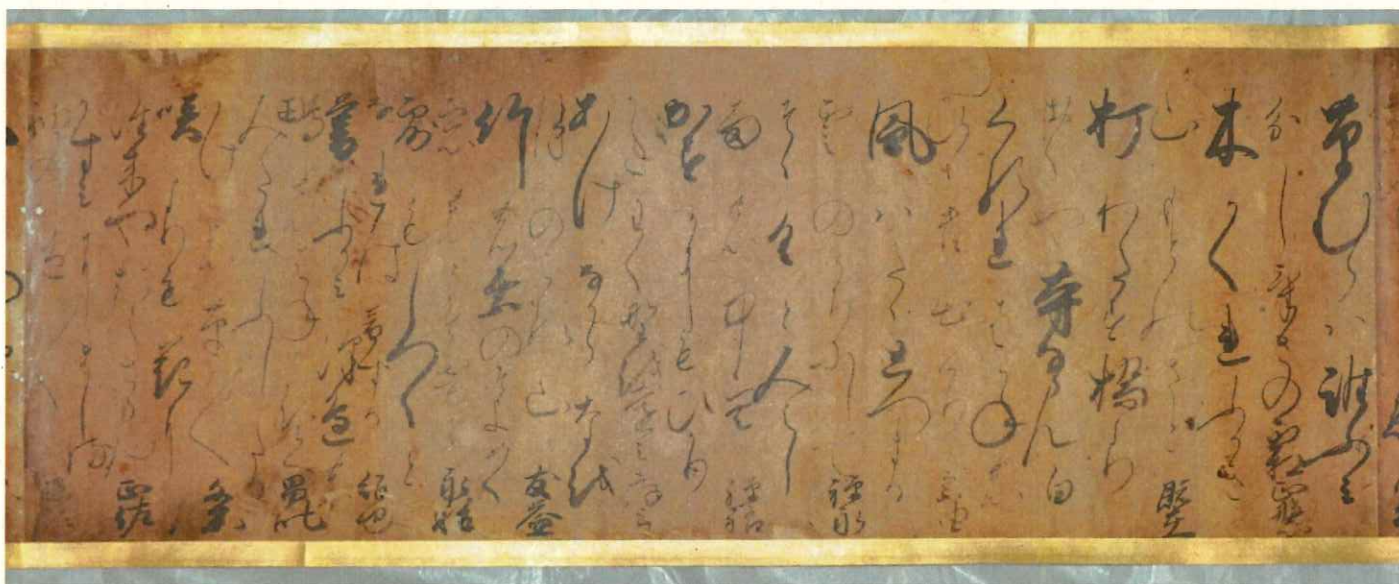




第1紙（初折表）



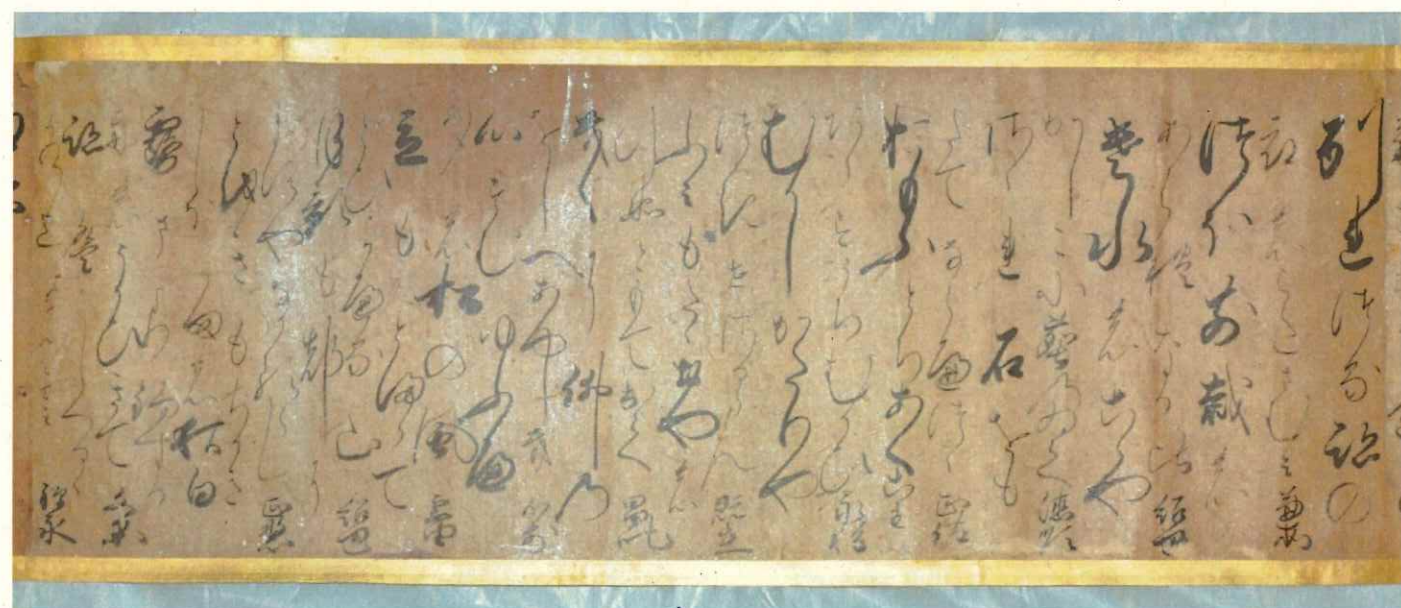
第2紙（初折裏）



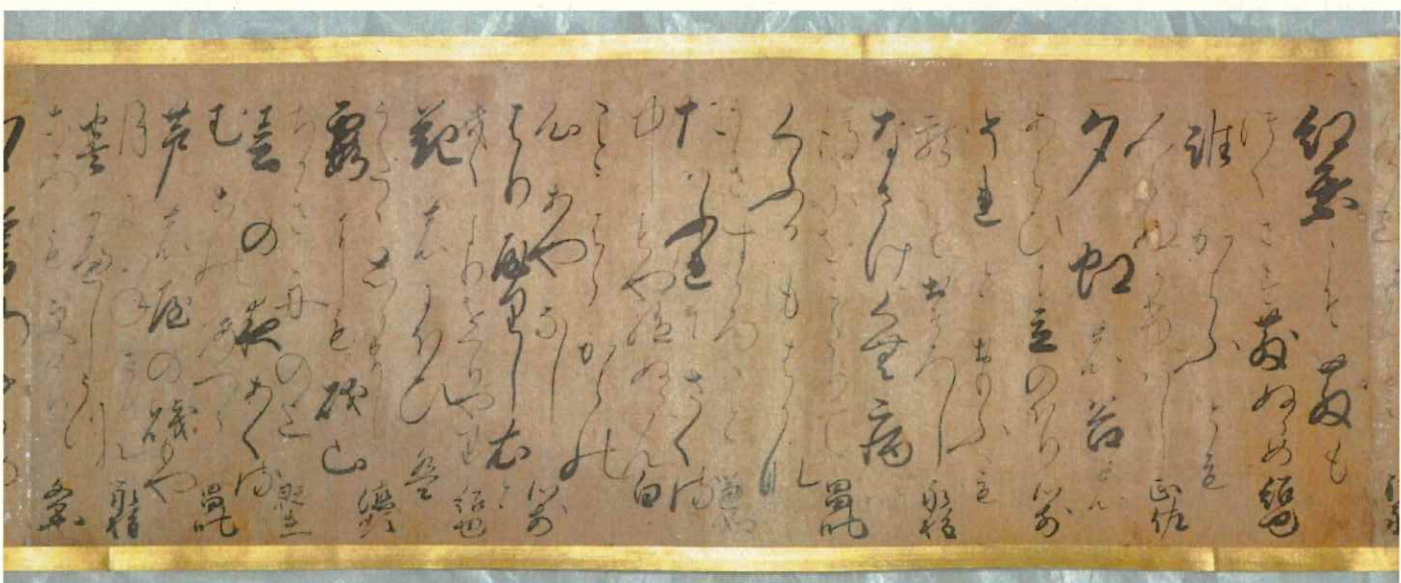
第3紙（二の折表）



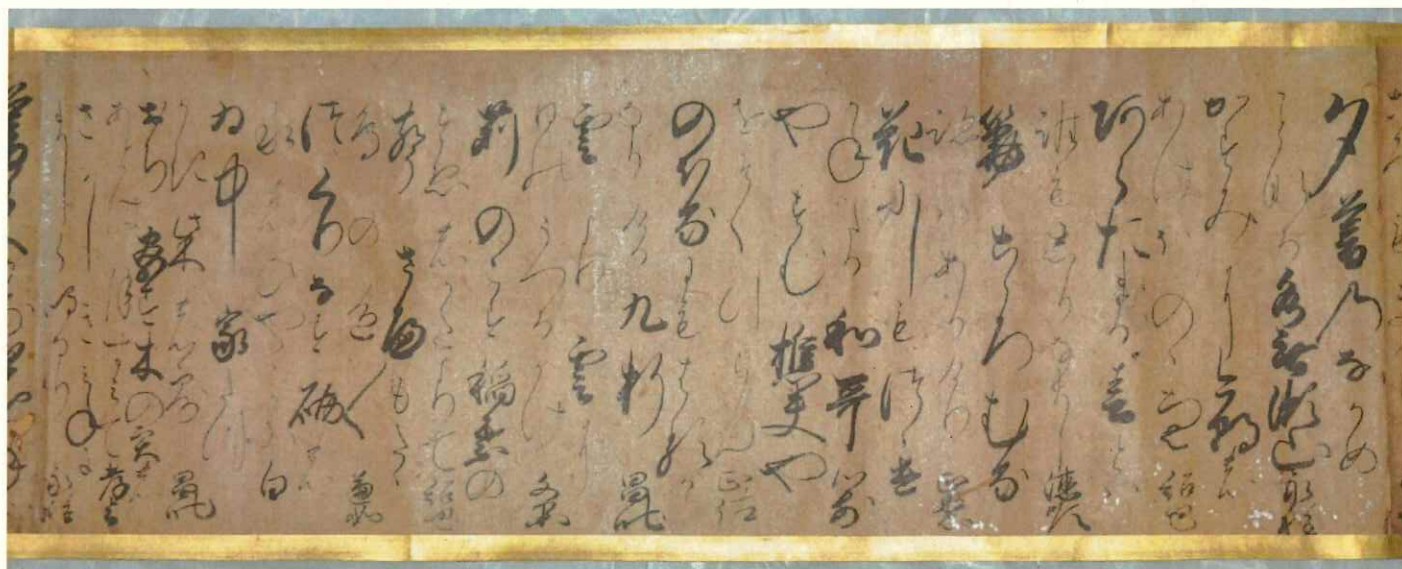
第4紙（二の折裏）※本来は三の折裏



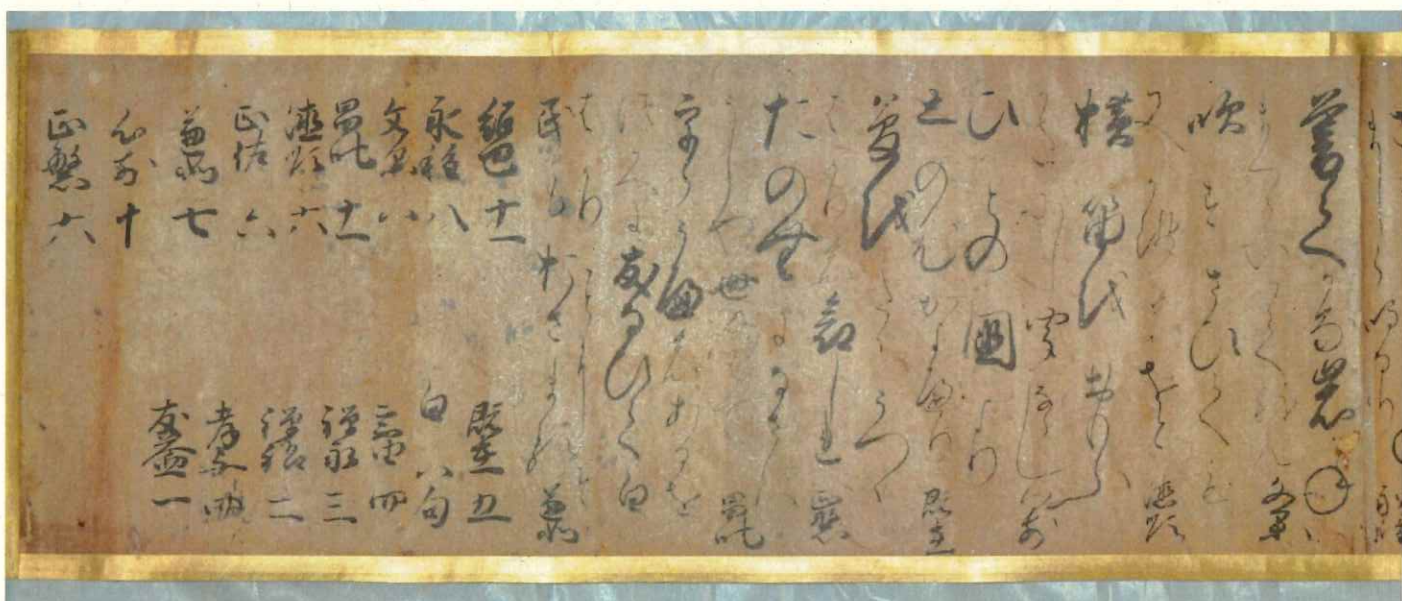
第5紙（三の折表）※本来は二の折裏



第6紙（三の折裏）※本来は三の折表



第7紙（名残の折表）



第8紙（名残の折裏）

【凡例】

- ・原文の表記は、原則として、漢字は常用漢字を、仮名は通行の字体を用いた。
- ・各連歌冒頭の数字は句Noを示すが、第九百韻のためナンバリングは801からとした。
- ・紙継目は破線で示し、カッコ内に紙数・原形態の折および表裏（オ・ウ）・折ごとの句数を記した。なお、錯簡箇所については、本来の折の名称を紙継目部分の右傍に記した。
- ・八紙「名残の折」の句上に記された連歌作者名のうち、名字等が判明する者については、右傍にそれを記した。なお、注記にあたり、本論注（一）辞典・著書を参照した。

天正六年 五月廿日

第九

811	打わたす橋より	
810	山もとのさと	既在
809	草むらハ誰ふみ 分しけさの霜	正繁
808	野辺より野への さをしかのこゑ	心前
807	一とおりの秋の あらしや過ぬらん	兼如
806	霧のをちかた	正佐
805	出てより夜を待 月に舟うけて	徳順
804	なかれに松の こすゑかたふく	昌叱
803	川嶋やとをくも 波のかゝるらん	文閑
802	山／＼こゆる 夕たちの雲	永種
801	賦朝何連歌 四方にふく風を 手にとる扇哉	紹巴

（一紙 初折オ 八句）

827	826	825	824	823	822	821	820	819	818	817	816	815	814	813	812
故郷をいつくに	たのむ旅人 かへらんほとを さかつき取そへて	ことふきに酒の	千代のためしに ひくやしめ縄	大はらや神の まつりの折にふれ	袖の色／＼ かすミにまじる	咲よりも花に 往来やたえさらん	かけの草／＼ みたれふしたる	暮ふかミ沢辺の 鳴のはねかきて	露もしつくと なれは音する	窓のうす雪に 竹の葉のそよめく	あけなからなを 月のこる山	かすかにもひかり かたわく野を遠ミ	そくとみえし 雨の中空	風ハたゝしつまる 雲のうちにして	おくや寺ならん くるれはかねの ひゝき出けり
	兼如	既在	正繁	心前	徳順	正佐	文閑	昌叱	紹巴	永種	友益	孝与	禅祐	禅永	宗由 白

――(三紙 初折ウ 十四句)――

843	たゞきよる戸さしハ	
842	おもひよへるも 人のつれなさ	宗由
841	れいならぬ心ち なからに程もへぬ	兼如
840	風もよきよと 玉たれのうち	孝与
839	暮ぬまをしハし よりふすをしまつき	昌叱
838	硯の水の こほれもて行	紹巴
837	杖の露なみた 読ふミもいさめの	白
836	つらきあき風 人のこゝろの	心前
835	いつまでか待て しもミむ空の月	文閑
834	草の戸の雨 春たにさひし	昌叱
833	きかはやも弥生の すゑの郭公	永種
832	うくひすのこゑ したひもて行	孝与
831	青葉よりあらハれ そむる花の色	紹巴
830	をちこちの山 こすゑのひまの	禅永
829	分くらすかりはの 野へのへたゝりて	禅祐
828	つゝく雪の日 立ち出なまし	宗由

(三紙 二の折オ 十四句)

859	心すむゆふへ	
858	きくに仏の をしへあやしき	心前
857	ふミもたゝおやの 行えともて出て	昌叱
856	むかしかたりや つきせさるらん	既在
855	おもふとちあくこも あらすうちむかひ	永種
854	さゝれ石をも たてならへつゝ	正佐
853	遣水のこゝや かしこに塵のゐて	徳順
852	つほ前栽の あはれなる比	紹巴
851	別れつる跡の 衣のはたさむミ	兼如
850	荒にし宿も 菊さける色	白
849	松の葉の露なから にもおちたまり	文閑
848	秋にすゝしき 真砂地の月	心前
847	ひろふにや時をも 今ハわすれ貝	正佐
846	塩のひかたは あさみにそなる	昌叱
845	大舟の跡にし こくや遅からん	紹巴
844	つゐに明やらて したひいてゝも つらき別ち	正繁
		心前

(錯簡、本来は「三の折ウ」
(四紙 二の折ウ 十四句)

875	874	873	872	871	870	869	868	867	866	865	864	863	862	861	860
霞にも磯山	花のほひは うたゝしらまし	はりやりし衣と きくよりをくりやり	心あやなし ことはらからの	たハふれにさくる 中もや絶ぬらん	うきすゝろこと くふるもはかな	なさけくむ病ハ 後にをこたりて	龍はおそろし それとおもふも	夕虹の谷の あはひに立のほり	みえぬかけハし 誰かよふとも	紅葉こそ散も つくさす散ぬらめ	水上の雲 跡はしくるゝ	霧まより釣する 舟のうかひきて	しほかまの秋 とおきもちかき	月影も都に ますやなかるらし	夕の松の風 立もとまらて
	徳順	紹巴	心前	白	兼如	昌叱	永種	心前	正佐	紹巴	禅永	文閑	白	正繁	紹巴
															宗由

(錯簡、本来は「二の折ウ」)
(五紙 三の折才 十四句)

891	890	889	888	887	886	885	884	883	882	881	880	879	878	877	876
おち尽す木の実の	かき柴の露	つくりなす砌の 水のひやゝかに ゐる中家たつ	鳥の色く 声さへもたゝ	苧のこす稲葉の すゑのかたよりて	雲より雲に 日のうつるかけ	のほるにもはるか なりける九折	やすむ樵夫や をそく行らん	花にしもつゝけ かねたる和歌	筆こゝろむる 跡ハありけり	あらたまる春とハ 誰もしりなまし	かすみに今朝の あけほのゝ空	夕暮のなかめ ことなる水無瀬山	巻かへしうつ ころも更けり	芦の屋の賤もや 月にいねさらん	ちかき舟の上 春の夜あくる むこの海つら
	昌叱	白	兼如	紹巴	文閑	昌叱	正佐	心前	正繁	徳順	紹巴	永種	文閑	永種	昌叱

(錯簡、本来は「三の折」才)
(六紙、三の折ウ 十四句)

892 あとは月すみて 孝与
さかしきミねに 永種
ましら鳴なり

893 暮てかる岩かね (七紙 名残の折才 十四句)
まくらいかてねん 文閑

894 吹すさひても 徳順
又かせのをと

895 横笛をおもふ 心前
かたにし聞ならし

896 ひとの国より 既在
しのひかよへり

897 夢をたうつゝ 正繁
はかりの哀しれ

898 たのむになさは 昌叱
うしや世のはて

899 うらうへのあるを 白
つかへに友なひて

900 はかりことにそ 兼如
民もおさまる

(里村氏) 紹巴 十一 既在 五
(松永氏) 永種 八 (聖護院門跡道遵) 白 八句

(京都六条道場) 文閑 八 (あるいは四条道場) 僧 宗由 四
(里村氏) 昌叱 十一 (北野社松梅院傳) 禅永 三

(松平氏) 徳順 六 禅祐 二
(猪苗代氏) 正佐 六 孝与 四

(兼如) 兼如 七 友益 一
(廣中氏) 心中 十 (元興寺高坊僧)

正繁 六

(八紙 名残の折ウ 八句)